

集落挙げて農山村復権



グリーンツーリズム

暮らし考房

栗田 和則

「グリーンツーリズム」を耳にするようになって久しい。

しかし、この言葉は言葉だけが一人歩きをし、かつ中山間地の農家に期待を持たせた言葉は、なかったのではないかと思う。

一九九〇年代になって、豊かになった日本でも、これからは、自然に恵まれた農山村で余暇をすごしてもらおう、いや、ヨーロッパのように農村で余暇をすごす人が増えてゆくだろうという考えと、閉塞感の中山間地農業を開く切り札とさえ言われ、急激にこの言葉が農業関係者に広まった。

一九九二年、農林水産省が「グリーンツーリズム研究会」を立ちあげた年、金山町山菜研究会は生産するタラの芽の販売代金を積み立て、それを片手にヨーロッパ農業研修に出かけた。

「女性が主役」としたこの旅は、伝統的な生活スタイルを大切にする農家の暮らしにふれたいと、ドイツ・バイエルン州で二泊の農家ホームステイを組み入れた。

妻と私の宿泊先は、牛と豚を飼う専業農家。寝室は、屋根裏を改造した三階。朝食は、パンとコーヒーにミルク・ハム・チーズのみ。カール氏夫妻と一緒にテーブル。

農業をしながら、ベットと簡単な朝食を提供するB&B方式の都市の人々の受け入れ（台所は希望すれば家族と共用で利用できる）、農家の暮らしを変えないで、こんな形で都市の人々を受け入れることが出来るならおもしろい。旅立つ直前に完成したログハウスがこんな利用もできると妻と語った。

かくして、暮らし考房流グリーンツーリズム？「ログ・フェアリエン」（休暇の家）と名付けた、和風ログを利用した会員制B&B方式の民泊はスタートした。

「暮らし考房」は、ヨーロッパ行きの直前に完成した、私設の、その名の通り「農山村での豊かな暮らしとはを考える小屋」である。

その活動は、哲学者、内山節氏や村の青年たちと「山里フォーラム」と名付けた哲学講座やレクレーションを開催したり「うまいもの

を食う会&語る会」等の学ぶ場や、本藍染・草木染を通して、創造する喜びの再発見や、農林業の研究生の受け入れ、さらには「学びの森」を使った子供たちの自然教室、森林学習を行う等多彩である。

中でも力を入れているのが、旅の人（都市の人）を迎えることで、土地の者がこの良さに気付き、ここに住む自信と誇りを回復し、むらの未来を描きたい。それが旅の人にとっても、自らの都市の日常を省みることにつながるという交流を民泊の形で行うことである。

暮らし考房流民泊「ログ・フェアリエン」は、①特定少数の会員が利用する施設である②農林業を優先し、営業行為としない③ここに来たいという人、滞在する人のみを受け入れる④外足（足はタクシー）、外食、外浴（町営温泉）とし地域の出会いを多くする⑤自由にすぎし、山里の日常・時間にふれてもらう⑥地域内分散の受け入れとする―等を原則とする。

Value Sight 農 林



一九九八年七月、金山町にも交流施設として、ホテル「シェーネスハイム金山」がオープンした。金山町とJR東日本が提携した第三セクター方式で、滞在型をコンセプトにしている。

この企画の段階で、何度かJR東日本と話し合いがもたれ、十四戸の山里、杉沢地区に入って、技と暮らしにふれてもらう「体験と民づの山里、共生のむら すぎさわ」が一緒

に立ちあがった。

四戸の農家、七人の山里の案内人が、日々の暮らしの中で行っている木工やつる細工、あるいは刺し子や農産加工を伝えましょう、農業や森づくりも体験させましょう、民泊もできます、というものである。

人の入りは予約制とし、体験者の送迎はホテル、体験料支払いは体験先農家にと、主体は農家に、ホテルはマージンさえ取らない方式。スタートから三月間で一、〇〇〇

名を超える入りとなった。

村人が自分の技で先生になり、時間と物が少しずつ金になる「ここで、こんなことが出来るとは思わなかった」と喜ぶ人。「一度に五、六人程度の方が楽しい」と言ってくれる人。案内人はその手ごたえを満喫している。

何度か杉沢を訪れ、杉沢を心のふる里と思ってくれる人々ができ、そんな人に杉沢の産物を提供する新しい関係「すぎさわ、ふるさと倶楽部」も生れた。

杉沢にはもっと宝がある。古くから二月泣きイタヤと呼ばれたメープルサップがあり、絵図をかざるひな祭りが四月に行なわれている。

都市と杉沢の間に、JR東日本と「シェーネスハイム金山」をはさんで、宝物を生かす企画がJR東日本が提案する「新しい旅」に加わる。むらの暮らしの技や文化がクローズアップされる度に、それに関わる村人が増える。

人が入れば情報と物が動く。そのことを通して、むらが自信と誇りと元気をとりもどせればよい。

今、グリーンツーリズムの受け手として、どの自治体にも交流施設が生まれ、宿泊・体験・直売と、いずこも同じパターン。客は施設に入り、むらを車窓に見て帰る。施設から出ない人の入りは、地域の農業農村の活性化には結びつかないし、来訪者にも地域の暮らしや文化は伝わらない。

「共生のむら すぎさわ」は、施設からむらに出させる試みであり、行政が旗振れど増えない農家民宿に代わるものとして、農業を展覧させるための営業としない都市の人々の受け入れ、一民泊（休暇の家）の試みである。世の風潮は、ビジネス・商売・金になることを良しとする。しかし、商売を目的としないことで深まる人間関係があり、むら人が共々できる喜びがある。

ようやく芽生えた都市の人々の農山村での余暇活動「グリーンツーリズム」。

その人の奪いあいをするより、分かちあうことで農業農村の元気につなげたい。

栗田 和則

1944年生まれ。金山町杉沢。小学校教員の後、農林業専門に。「暮らし考房」を妻と主宰。「共生のむらすぎさわ」代表世話人。金山町グリーンオブジェクト協議会副会長。金山町山菜研究会会長。「山里フォーラムinかねやま」実行委員長。東北農村文化協会代表委員。山形県林業士。指導林家。全国農林水産祭林野庁長官賞受賞。山崎記念農業賞受賞。著書「耕す日々」、「21世紀農政の課題」（共著）